

互いに愛し合うために〔要約〕

Iヨハネ2:7~8

- 7 愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いているのではありません。
むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、
あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです。
- 8 しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、
あなたがたにとっても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。

「古い命令」と「新しい命令」と言う言葉は、二つとも「互いに愛し合う」という同じ教えのこと。

レビ記 19:18 あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である。
ヨハネ 13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。
わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

本日は、①「誰を愛せば良いのか」 ②「どのように愛せば良いのか」 ③「イエス様の愛に倣う」という3点から、み言葉を頂く。

①「誰を愛せば良いのか」
イエス様は、神の子とされたクリスチャンだけでなく、「すべての人」を愛された。
ヨハネの福音書でも、イエス様は身分や民族、罪びとであるかどうかに関わらず、関わる人々と1対1の関係の中で、その人の友として、お一人お一人に愛を示された。イエス様のように、すべての人を友として愛することは、本当に難しい。

②「どのように愛せば良いのか」
主イエス様は「愛されなくても愛された。」
イエス様の愛は、2つの性格がある。

Iヨハネ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

1つ目は「一方的な愛」。イエス様は、私たちが「イエス様なんか知らない。どうでも良い。」と、イエス様から離れ、罪びととして、勝手気ままに生きていた時から、私たちを愛してくださった。私たちが主イエス様を愛し、求めたから、イエス様がその愛にこたえて下さったのではない。まさに、主イエス様の方から、まず先に、そして一方的に愛してくださった。

2つ目は「選び取る愛」。イエス様は、罪びととして生きる私たちに、永遠の命を与えるために、ご自分の命を捨てて下さった。ご自分の命よりも、私たちに命を与える道を選び取って下さった。

つまり、「愛されなくても愛しなさい。」「自分よりも、相手を選びとるほどに愛しなさい。」
ということ。・・・聞けば聞くほど、無理に思えてくる。ですがヨハネは、神の子とされたクリスチャンであれば出来ると信じたからこそ、手紙を書いた。

Iヨハネ 2:11 光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。と、憎むことを、強い表現で戒めた。私たちが自分の行動基準とすべきは、「憎しみ」ではなく「愛」だ。

③「イエス様の愛に倣う」
私たちが「互いに愛し合う」ことは「古い命令」であり、同時に、今の私たちにとっては「新しい命令」だということを感じたい。

古い命令・・・律法の役目:「人にはできない」ことを悟らせること。
今日の教えで言う「自分には、互いに愛し合うことは出来ない。」「神様の教えを守れない。」と、自分の罪、自分の限界に気づかせる役割のこと。

新しい命令・・・主イエス様と、共に歩み、導いて頂くことで行う教えのこと。

ヨハネ 15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。私自身は、仲の良い友人、ともすれば家族のためですら、中々、命をかけることが出来ない。けれども、唯一、イエス様は、この愛を完全に、いやそれ以上に示して下さいました。

主イエス様は、私たちの神様・主であるお方であり、私たちは本来、神様の友人であるどころか、僕(しもべ・奴隷)ではない。しかし、神であり主であるイエス様が、私たちのために、人としてこの世界に生まれて下さった。そして、僕・奴隷である私たちが友(とも)と呼び、私たちの一人一人と、一対一の関係で向き合って、私たちの罪のために命を捨てて、十字架にかかって死んで下さった。

「互いに愛し合う」という教えは、自分で守ろうとしても、決して守り切ることのできない「古い命令」ではなく、イエス様の愛を知り、イエス様に委ね、変えて頂くことで行う「新しい命令」として、愛し合うことが出来る。今の自分自身と、み言葉の乖離を示され、変えて頂くのだ。

信仰は根性論ではない。
クリスチャンとは、自分の歩みの主導権を、自分から、主イエス様に明け渡して生きる者だ。
自分は愛することのできないものだけれど、罪人である自分をも赦し、愛して下さった主イエス様なら、出来るように変えて下さる。そのように、信じ歩むことだ。

「愛したい」と願い、祈るまでは、私たちに委ねられている人間の側の責任。その上で「愛する」ことが出来るよう変えて下さるのは神様の働き。
自分の力でなくてよい。主が変えて下さると信じる事が出来るのは、本当に感謝なことではないか。

とは言っても、いざ「さあ、愛せるように、イエス様に委ねて頑張るぞ！」と意気込んでも、改めて現実の自分に目を向けてみると、イエス様の愛を知りながら、そのように愛せない自分に気づかされる。愛せない自分に対して。心が責め、少し自己嫌悪に陥ってしまいそうになる。

Iヨハネ 3:19 それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。
Iヨハネ 3:20 たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じたからです。

神様は、私たちが完全には「互いに愛すること」が出来ない弱さも含めて、「すべて」ご存知。ヨハネはここで「神様のみこころに歩みたい、でも歩むことが出来ない。」そのように悲しむわたしたちの心も、神様はご存知ですよと伝えようとしている。

「神様は、神様の命令を守れない、こんなわたしは嫌いなんじゃないか？がっかりされているんじゃないか？」このように悲しむわたしたちに、イエス様は「顔を上げなさい」と声をかけてくださる。

大木先生は、口癖のように「日本人とユダヤ人はとてもよく似ている」と言われる。つまり「とてもまじめだ」と言う点だ。ヨハネは、イエス様に委ねなさいと教えるが、私たちは、イエス様に委ねることですら、自分の力で頑張らなくてはいけないと思ってしまう。イエス様にかじ取りを任せることですら、なんとか自分の力で、かじを明け渡そうと頑張ってしまう。そして、できなくて自己嫌悪に陥ってしまう。そのようにもがく自分でさえも、神様はご存じで、愛して下さる。そこまで含めて、全てご存知なのが神様だ。

「神は愛だ」と知識として知ることと、
「神様が本当に、自分を大切な存在として愛して下さっている」ことを知ることは全くの別物。

私たちは、神様が本当に、私自身を大切な存在として愛して下さっている、このような神様であれば、心から委ねることが出来る。このように示され、変えられていくことが、神様を知ること。私たちは、神様を知っているだろうか。そして、神様を知りたいと祈り、願っているだろうか。

④まとめ

本日は「互いに愛し合うために」と言うテーマでみ言葉を頂いた。私たちが従おうとするのは、ご自身の命を懸けてまで、私たちが愛して下さるイエス様。そしてイエス様は「互いに愛し合う」ことですら、自分の力で頑張ろうとして、でも出来なくてもがき、悲しむ、そんな私たちのことまでご存じで、愛して下さる。

このように、私たちは、全てをご存じで、その上で導いて下さる主に委ね、「すべての人」と愛し合うことを目指すことが出来る。そして、「互いに愛し合う」最初の場所は、この「教会」だ。

愛する最初の範囲は「兄弟」つまり神の子とされた教会のクリスチャン同士で愛し合うということ。クリスチャンの歩みは、一人で完結するものではない。「私は、毎日お祈りをし、毎週礼拝に出ている。献金もして、奉仕もしている。立派なクリスチャンだ！」このように考えることがあるとすれば、それは、イエス様の「互いに愛し合いなさい」と言う教えを忘れてしまっている。

教会とは「召された者（クリスチャン）たちの集まり」のこと。主イエス様を信じるクリスチャンが集まる事で、教会は始まった。そして、教会は、クリスチャンが心一つにして、集まり、晩餐を通して、主イエス様を記念し、交わりを持ち、主イエス様を共に賛美する所だ。

私なんかは普段、特に制限がなければ、気の合う人と、一緒にいたいと思ってしまう。しかし、教会とは、年配の方たちから、ばりばりの社会人、学生から子どもたちまで、性格も年代も肩書もバラバラな人たちが、主イエス様を信じる信仰の一致によって集まるのだ。そして、共に主イエス様を礼拝し、主イエス様のお体であるこの教会と言う場で互いに愛し合う場所だ。

教会の兄姉と互いに愛し合う。これこそが、まず求められているのではないだろうか。

今は中々、みんなで教会に集まり、礼拝をお捧げすることの難しい状況の中にあるが、そのような時こそ、教会のため、そして兄姉、先生方のために祈り、自分が出来ることを考え、共に愛し合う、そのような関係に導かれることを願う。

今週1週間も、主に愛されるものとして、改めてその愛を知り、その愛に倣って、「互いに愛し合うもの」として変えて頂けるよう、祈り、歩む者として頂ければ幸い。

以上